



第14回(平成17年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業

素顔のベトナムに出会いました



「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
財団法人鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会 会長

中津川 宏和

(青年海外協力隊鹿児島県OB会 会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、今年で14回目を迎えることができました。

この事業は、青少年を開発途上国に派遣することにより、その国づくりに貢献している青年海外協力隊の活動を体感し、ホームステイや学校などで現地の方々と交流を行い、国際協力・国際交流に対する理解を深め、国際性豊かな青少年を育成することを目的としており、青年海外協力隊鹿児島県OB会・鹿児島県青年海外協力隊を支援する会・(財)鹿児島県国際交流協会からなる実行委員会で実施しています。

今回の体験事業では、中学生・高校生14名の団員が、2回の事前研修でベトナム語や国際協力についての研修を受けた後、平成17年7月24日(日)～31日(日)にベトナムを訪問しました。

ベトナムは、戦争の時代が長く続き、終戦から30年経った今でも傷跡が一部残っていますが、1986年に始まったドイモイ(刷新)政策により経済発展が始まり、たくましく前進している国です。そのベトナムには独自の文化や生活様式を持った54の少数民族が共存しており、今回訪問したモー・ハイ村では、水道やガスがない中で、少数民族ムオン族が自給自足に近い暮らしを送っています。団員たちは、数十年前の日本の田舎を思わせるこの村でのホームステイや交流会を通じて理解を深めるとともに、現地の方々のたくましく生きる力を感じたことでしょう。

一方、青年海外協力隊は、途上国の経済社会が発展するために、住民と一体となった草の根レベルの活動をしており、青年海外協力隊事業40周年の今年までに、鹿児島県出身者は527名(平成17年5月末現在)派遣され、人口あたりの派遣人員数では全国一位の水準を誇っています。今回、国際協力の現場として、天然林回復計画やホアビン省保健医療サービス強化プロジェクトの現場を視察し、青年海外協力隊や専門家と意見交換会を行いました。団員たちは、国際協力やボランティアについて考え、自分の夢や学ぶ意義などを再認識できたことでしょう。

今後、事業に参加した団員たちが、感動を胸にし、鹿児島のために、そして世界平和のためにこの経験を生かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々とこの新鮮な感動を共有することで、鹿児島の国際化に貢献できればと考えております。

最後に、この事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 中津川 宏和

ごあいさつ..... 1

鹿児島県総務部国際交流課長 松田 典久

第14回（平成17年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 2

参加団員等名簿 3

スケジュール 4

地図 5

体験事業ドキュメント 6

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと.....14

「いざ、国際協力！！」	安 田 大 地
「人生の宝物」	駒 走 さやか
「ベトナムでの経験」	小田原 裕
「ベトナム滞在記」	大 社 隆太郎
「ベトナムのすがお」	有 村 綾 香
「体験事業を終えて」	平 石 敬 乃
「私たちの訪ねた村」	有 留 小百合
「ベトナムで出会い、学んだこと」	永 家 賢 人
「私の将来の夢」	蔵 元 み え
「私のベトナム体験記」	西 野 栄梨花
「忘れたくないベトナムでの日々」	渡 辺 博 人
「世界が広がった夏」	大久保 彰 子
「ベトナムで学んだこと」	友井川 美 都
「他の国の文化を理解する」	新 原 夏 帆

団長報告

弓場 秋信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長）28

同行者感想.....29

「ベトナム訪問に同行して」	増 田 彰 一（(財)鹿児島県国際交流協会 総務企画課長）
「変わるけど変わらないベトナム」	山 下 美 穂（青年海外協力隊OB）
「15人兄弟」	原 奈 美（JICA国際協力推進員，青年海外協力隊OB）
「シン・チャオ！」	政 元 泰 江（南日本放送 報道部記者）
「14人の熱い夏に寄せて」	山 本 輝 志（南日本新聞社 社会部記者）

新聞記事（南日本新聞）34

参考資料41

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長
松田典久

平成17年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、青少年の皆さんを開発途上国へ派遣し、そこで国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動状況を直に体感するとともに、ホームステイ等を通じて現地の方々と交流を行うことにより、国際協力・国際交流について理解を深めてもらい、国際性豊かな人材の育成を目的とした全国でも画期的な事業です。

また、鹿児島県では、我が国の南の拠点として、「アジアに広がる国際交流ネットワークの形成」を目指し、「多様な国際交流の展開」及び「地域特性を生かした国際協力の促進」を推進していますが、本事業は、その趣旨に沿った意義ある事業であると思っております。

近年の世界情勢を見ますと、戦闘状態が続いている国、テロ事件の発生、領土や歴史問題を巡る外交問題など様々な難題が発生しております。これらの難題を解決していくためには、文化・習慣・考え方などについての一人一人の相互理解が重要であると考えます。

このような中、今回の体験事業では、8日間の日程でベトナムを訪問し、青年海外協力隊員の活躍ぶりに直に触れ、また、ホームステイや農業体験等を通じて現地の方々と心のふれあいを体験し、国際協力や国際交流に対する理解を深めることができたと思います。

事業終了後の表敬訪問や報告会では、文化や言語、生活習慣など、日本とは異なった環境の中で、苦労したことや楽しかったことなど、思い出深い貴重な体験をしたことなど、皆さんの感想もお聞きすることができ、たくましくなった皆さんを頼もしく感じました。

この貴重な体験で得た感動を心に深く刻んで、自分たちのできるところ・身近なところから国際交流・国際協力について考え、そして行動していただきたいと思います。

併せて、その体験を御家族や友人、あるいは地域の方々にもお話して、多くの人が国際交流や国際協力に関心を持っていただけることを期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会の各団体及び実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様から心から感謝を申し上げますとともに、皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第14回(平成17年度) 鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 **主催** 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
(財)鹿児島県国際交流協会
- 2 **共催** 鹿児島市，枕崎市，串木野市国際交流協会，国分市国際交流協会，知覧町
- 3 **後援** 独立行政法人国際協力機構九州国際センター，鹿児島県，
鹿児島県教育委員会
- 4 **協力** ベトナム社会主義共和国在日本国大使館
- 5 **協賛** (株)鹿児島銀行，小正醸造(株)，薩摩酒造(株)，
(財)古謝育英会，長島商事(株)，弓場貿易(株)
- 6 **日程**

4～5月	募集
6月18日(土)	第一回事前研修
7月2～3日(土，日)	第二回事前研修
7月24日(日)～31日(日)	派遣
8月3日(水)	表敬訪問
8月6日(土)	報告会
9月	報告書作成

参加団員等名簿

■団員

	名 前	性別	学校名・学年	推薦市町等
1	やす だ だい ち 安 田 大 地	男	鹿児島市立 鹿児島商業高等学校 3年	鹿児島市
2	こま ばしり 駒 走 さやか	女	鹿児島市立 鹿児島玉龍高等学校 2年	鹿児島市
3	お だ ばら ゆう 小田原 裕	男	鹿児島県立 鹿児島水産高等学校 1年	枕崎市
4	たい しゃ りゅうたろう 大 社 隆太郎	男	鹿児島県立 鹿児島水産高等学校 1年	枕崎市
5	あり むら あや か 有 村 綾 香	女	鹿児島県立 串木野高等学校 1年	串木野市
6	ひら いし ゆき の 平 石 敬 乃	女	串木野市立 串木野西中学校 3年	串木野市
7	あり とめ さ ゆり 有 留 小百合	女	鹿児島県立 加治木高等学校 2年	国分市
8	なが いえ けん と 永 家 賢 人	男	鹿児島県立 川辺高等学校 2年	知覧町
9	くら もと み え 蔵 元 み え	女	学校法人 希望が丘学園 鳳凰高等学校 1年	知覧町
10	にし の えりか 西 野 栄梨花	女	鹿児島県立 川辺高等学校 1年	知覧町
11	わた なべ ひろ と 渡 辺 博 人	男	鹿児島県立 岩川高等学校 3年	実行委員会枠
12	おおく ほ あき こ 大久保 彰 子	女	鹿児島市立 鹿児島玉龍高等学校 2年	実行委員会枠
13	とも いがわ み さと 友井川 美 さと	女	学校法人 希望が丘学園 鳳凰高等学校 2年	実行委員会枠
14	にい はら か ほ 新 原 夏 帆	女	額娃町立 青戸中学校 1年	実行委員会枠

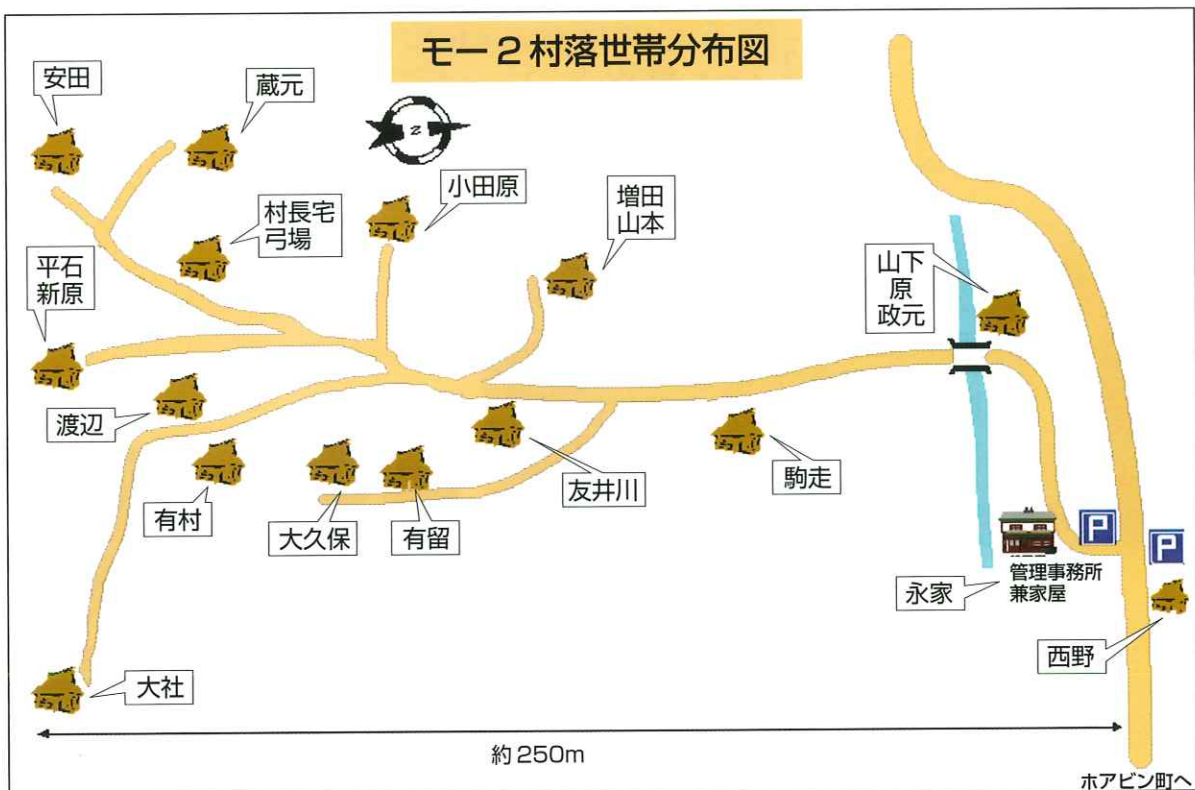
■同行者

	名 前	性別	所 属	担当
1	ゆみ ば あき のぶ 弓 場 秋 信	男	鹿児島県青年海外協力隊を 支援する会 事務局長	団長
2	ます だ しゅう いち 増 田 彰 一	男	財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長	会計管理・記録
3	やま した み ほ 山 下 美 穂	女	協力隊OB 鹿児島純心女子大学 看護栄養科助手	健康管理
4	はら な み 原 奈 美	女	協力隊OB JICA国際協力推進員 実行委員会事務局	記録・調整
5	まさ もと やす え 政 元 泰 江	女	南日本放送報道部 記者	
6	やま もと てる し 山 本 輝 志	男	南日本新聞社社会部 記者	

スケジュール

日	曜日	時間	場所	内容	宿泊
24	日	11:00~11:30	鹿児島空港	結団式	ハノイ市 ホテル
		12:30~14:05		鹿児島~韓国(インチョン空港)	
		19:40~22:10		韓国~ハノイ(ノイバイ空港)	
25	月	8:30~ 9:30	ハノイ	ホテルからJICAベトナム事務所へ移動	ホームステイ
		9:00~11:00		JICAベトナム事務所オリエンテーション	
		13:00~16:00	ホアビン省 モー2村	ハノイからホアビン省へ移動	
		16:00~18:00		ホストファミリーとの対面式 各ホームステイ先へ	
26	火	終日	ホアビン省 モー2村	ホストファミリーとの農作業など	ホームステイ
27	水	終日	ホアビン省 ケー村	ベトナム国北部荒廃流域天然林回復計画 概要説明,質疑応答及び現場視察	ホームステイ
28	木	8:30~10:00	ホアビン省 保健局	ホアビン省保健医療サービス強化プロジェクト 概要説明及び質疑応答	ホームステイ
		10:00~11:30	ホアビン省 総合病院	ホアビン省総合病院見学	
		13:00~16:00	ホアビン省	ホアビン省の中学校との交流会	
		夜	ホアビン省 モー2村	村の人たちとの交流会	
29	金	~10:00	ホアビン省	ホストファミリーとお別れ	ハノイ市 ホテル
		13:00~16:00		ホアビン省からハノイへ移動	
		18:30~21:00	ハノイ	JICA関係者との懇談会	
30	土	終日	ハノイ市内	ハノイ市内観光	機内
		20:30~		ノイバイ空港へ移動	
		23:20~		ハノイ~韓国	
31	日	~ 9:00	韓国	韓国着	
		9:55~11:30		韓国~鹿児島	
		12:00~	鹿児島空港	解団式⇒解散	

地図



体験事業ドキュメント

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月18日(土) / 7月2日(土)・3日(日)

第1回・第2回 事前研修



友達、出来るかな～
TV局も来ているし、すごい企画
に参加したことに気付いた。
学びたい🐰



7月2日(日)

結団式&出発

いよいよ出発!! 「1週間、やっていけるか」
という不安と「何があるんだろう～」というドキドキ
感とワクワク感があった。今、思えば 何の心配
も必要なかったなと思う。



街の様子

道路を渡るときに、焦って走ってはいけないようですよ。渡るだけで緊張だ、だそうです。バイクの量が多くて、人乗りをしてる人やカッターに乗っている人もいました。都会と田舎とでは、とても違っていました。まだ貧富の差が激しい、だそうです。



JICAベトナム事務所訪問



JICAは、いろいろな国の発展に協力していて日本からも看護婦さんや助産婦さんが派遣されています。私も、人を助ける仕事に就きたい☆



モー2村へ (ホストファミリーと対面)

すごいドキドキ♡した。早く家族に会って話をしてみたい。でも「自分、独りで大丈夫かな」という不安もあった。



7月26日(火)

モー2村ってこんな所

川・山・田 『自然』がきれい
犬も♡♡♡ホホとしていて、かまおなか
った。牛も♡♡♡ホホとしていて可愛い
♡ モー2村に帰りだい!!



7月27日(水)

北部荒廃流域天然林回復計画現場視察

山に登るのが大変でした。
車に酔って、気分が悪いのに山登り
は、頑張っています。頑張っ
て登れば、先には美しい清水があ
る。子供達が案内してくれだよ♡



ケー村交流会

短時間の間で仲良くなれた。
料理まで作ってくれて私達を迎えてくれた☆
この時に「笑顔が、いいな」と思った。



ホアビン省保健局&総合病院 視察

患者さんと、看護師さんの間に笑顔は無か、だ。病院だからなのかもしれないけど暗か、だ。日本の病院とは全く違、だように思う。病院だから、患者さんが元気になるような明るい空気にならばいいな♡と思う。



7月28日(木)

ホアビン省の中学校との交流会



女の子達は、足が^{長い}
 長い皆やせてる。隣に並ぶ
 のが取れないぐらいだった。
 歌、てくれ Thanks♡
 次、行く時はベトナムの歌沢山
 覚えてくるから一緒に歌おう
 ね♪



モー2村の人たちとの交流会 (お別れパーティー)

明日、出発、て考えると
 悲しくなった。モー2村の人は
 皆、優しくてイロニナ事を教えて
 くれた。この、モー2村に来ること
 ができて本当に良かった
 なあ。



お別れの時

優しくしてくれてありがとう。
 いろんな事教えてくれてありがとう。
 皆の笑ってる顔が大好きです♡
 ずっと元気ぞいて下さい😊
 いつか、また来ます☆☆



JICA関係者との懇談会

美味しいものも、たくさん食べ
 たい。果物も美味かった。
 JICAの人々は、真剣な事も話
 してくれて面白い話もできてる。
 三ヶ国語、話せるのもすごい。
 尊敬するところばかりで
 ある。



7月30日(土)

ハノイ市内観光

ホーおじさんの、お墓です。警察の人が厳しい顔ぞ入るのが 恐が、たどす。ベトナムで最も尊敬されてきた人物だぞうです。「偉大な人なんだな」と実感しました。



7月31日(日)

帰国&解団式

Japan回”のみんな
ただいま☆ 家族・友達・
じいちゃん・ばあちゃんに、ベトナム
の家族の事や自然の事をいろい
ろ話したい。すごく楽しか、たどす。
パソコンで調べるのと 実際行く
のとは 全然違いました。



8月3日(水)

帰国表敬訪問



無事に帰ってくる事が、
できました。協力して頂いた
人々の、お陰です。



帰国報告会 in 知覧町

8月6日(土)



この日が、みんな
など会うのは最後
となつた。せ、かく仲良
くなつたのに、最後なのか
と思うと、なぜか寂しい。
このメンバーでベトナムに行
く事ができて嬉しい。一生
忘れられない思い出となつた。
発表会は一、言、で、言、う、と、
成功だ。



いざ、国際協力!!

鹿児島商業高等学校 3年 安田 大地

僕がこの事業に参加しようと思ったのは担任の先生の紹介がきっかけでした。最初の頃は、派遣国のベトナムについては何も知りませんでした。でも、国際協力と異文化理解については前々から興味があり、その気持ちを鹿児島市から派遣される団員を決める面接にぶつけてみたら、見事に選ばれました。9倍もの倍率の面接に通った後は、2回の事前研修がありました。他の13名の団員とうまくやっていけるかが不安でしたが、団員のリーダーに選ばれたこともあり、1回きりのチャンスなので、悔いの残らないように積極的に活動していきたいと決意しました。しかし、出発前のこの時、僕はこの1週間の短い時間で、進路を変えられるような強烈な体験をするとは思っていませんでした。

楽しみにしていた時間ほど短く感じるもので、あっという間に7泊8日の旅が終わりました。たくさんの人々に出会い、驚き、感動・喜びを知りました。そして、感じたことをたくさんの人々に、今度は僕が伝えたいと思いました。

まずはホームステイで感じたこと。ステイ先の人はもちろん、村の人々はみんな明るく、楽しい人々でした。今、世界はたくさんの国々に別れてしまっていますが、心や友情、更に愛情までもが通じ合う限り、世界は一つであると感じました。だってもともと、「地球」という一つの「国」に生まれた僕たちだから、国籍が違って、人間ということには変わりはありません。大陸や言葉の壁を作ってしまったのも、神様のいたずらではないかと思うようになりました。日本人は外国人の人をヒトとは違う動物のように見ていたのかもしれませんが。そうした人種差別や偏見を乗り越えて、僕は日本と世界の国々を繋いでみたいと思うようになりました。

今回ホームステイしたモー2村は、首都のハノイから車で3時間ほどの山奥にある小さな村です。日本の昔の家のような、木で作られた貧しい村でした。ほとんどが自給自足の生活の中でも、明るく振舞ってくれた人々の笑顔の中に、日本人が文明を発展させてしまったことで忘れてしまった何かを見たような気がしました。

それと、ホームステイの中で家の子どもに恋をしてしまった人も何人かいます。人を愛することに変わりはない。想いが国境を越えた時には感動して泣いてし



(本人：後列右)

まいりました。

この1週間で、僕の進路や夢は大きく変わってしまいました。出発前は、高校を卒業後、就職しようと考えていましたが、帰ってきてからは外国語を学ぶ専門学校への進学を考えています。そして、たくさんの国々へ行き、世界を知り、青年海外協力隊への参加を考えるようになりました。将来的には、世界をまたにける仕事につきたいと思っています。少しでも国際協役に役に立ちたいです。だから、ベトナムから帰ってきて終わりではなく、これからが始まりだと思います。ようやく、僕の人生が動き出したような気がします。この貴重な体験をたくさんの人々に語り継いでいきたいと思っています。

この事業のメインテーマである国際協力についても理解できたような気がします。心から通じ合ってこそできる国際協力。だから僕は日本と世界を繋ぐ架け橋の一つになれるといいなと思います。これからの人生、体験したことを胸に秘めて強く生きていきたいと思います。

この事業の団員である13名の人たちには本当に感謝しています。自分を変えるきっかけになりました。せっかくなので、手紙を出し合って連絡を取り合いたいと思います。同行者である弓場団長や原さんにも感謝しています。僕たちの笑顔を取り続けてくれた政元さん、山本さん。会計の増田さん。僕たちの健康管理してくれた山下さん。この事業に関わるすべての人々に深く感謝しています。ありがとうございます。そして何より、この事業がこれから先、いつまでも続きますように。



人生の宝物

鹿児島玉龍高等学校 2年 駒走 さやか

きっかけは、教室にあった1枚のチラシだった。軽い気持ちで応募し、面接を受けた。倍率の高さと、合否の予定日に連絡がこなかったことから、半ば諦めていたが、信じられないことに、鹿児島市内で2人の中に選ばれていた。

いよいよ日本を離れ、ソウルを経てベトナムの首都ハノイに着くと、ちょうど小雨が降っていて少しじめじめしてはいたが、思っていたよりも蒸し暑くはなかった。

この体験では、本当にたくさんのことを学んだ。2日目のJICA事務所でのオリエンテーションではJICAのベトナムに対する活動内容や規模を学んだ。その中で2つ心に残ったことがある。1つは、日本人が一方的に何かを教えるだけでなく、日本人もベトナム人からいろいろなことを学んで日本に持ち帰り、役立てているということ。そしてもう一つは、経済発展と環境問題の両方のバランスがとれた援助を行うことが大切であるということである。この2つ目の内容を体験事業4日目のベトナム北部荒廃流域の視察をした時に改めて理解した。ここでは、ダム建設により、住む場所を失った人々が、焼畑を行い天然林が減少したため、JICAの人々が森林を回復させようと活動を行っている。片道40分の険しい山道をひたすら登り、急な斜面に苗を植えていく。私はここで援助の大変さを知った。

また5日目のホアビン省の保健局では、JICA専門家の高島さんや田島さん、協力隊員の門野さん、橋口さんと知り合った。高島さんの説明により、ホアビン省医療サービス強化プロジェクトの内容を理解することができた。このプロジェクトは、村・コミュニティ・郡・ホアビン省・ハノイと5段階に分けて、患者の状態に合わせて治療を行うというものだった。そしてその説明の後、実際にホアビン省で一番良いと思われる病院を見学したが、衛生面も悪く、2人の患者が1つのベッドに寝るといような、日本では考えられない状態だった。私は見学をしながら、これから発展していくこの国のために、何か自分にもできることがあればしてあげたいと思った。

そして何と言っても、ホストファミリーとの生活は、私にとって最高の思い出となった。4日間という本当に短い間だったが、本当の家族のように、みんな私に



接してくれた。言葉の通じない遠い異国の地で、こんなにも優しい笑顔に出会うことができ、私は胸がいっぱいになった。

帰ってきてこの旅のことを考えると本当にたくさんの人と出会い、貴重な体験ができたこと心から思う。またいつの日か、この知り合った13人の仲間といっしょにベトナムへ行きたいと思う。この経験は、私の人生の宝物だ。

最後に、今回は貴重な経験をさせていただいて、本当にありがとうございました。私はこの経験をこれからの生活に活かしていきたいと思います。

ベトナムでの経験

鹿児島水産高等学校 1年 小田原 裕

約1週間のベトナムの滞中で、新しいことをたくさん発見したり自分自身の様々な考えが変わりました。

新しい発見として1番心に残っているのは、家にトイレやお風呂がないことです。トイレは畑の真ん中でしたり、お風呂は川の水を浴びるという、日本で体験する機会がほとんどないような事でした。他にも、田んぼを耕すのに水牛を使うということや、家が高床式だということです。水牛はほとんどの家庭にいて朝早くから田んぼを耕していました。とてもどかで時間を忘れてしまいそうでした。高床式の家は風通しがよくいつでも涼しく快適に生活できました。

食事でも毎回、発見と驚きがありました。お客様をもてなす料理と村人が普通に食べる料理にはとても差があるように感じました。もてなしの料理には、肉がたくさん使われていたけど、普段の料理には肉があまり使われず、竹の子などの野菜が中心でした。食事の時には毎回のようにお酒が出てきました。僕の家のお父さんは朝から飲んでいました。お酒は手作りで、家にはたくさん作り置きがありました。

村での生活での発見の他に、首都のハノイでも発見や驚きがありました。初日にハノイ・ノイバイ空港に到着して外にでるとクラクションの音の多さとうるささに驚きました。市内に行くとバイクが多いということにも驚きました。バイクは2人乗りをしている人が多く、中には3人や4人で乗っている人もいました。道端には飲食店が多く、ベトナム人は朝ご飯や昼ご飯によく利用するそうです。朝早くからベトナム人は公園や道端にネットを張って、バドミントンをしていました。バドミントンは人気のスポーツらしく、スポーツショップが並び通りがあり、そこの店にはバドミントンラケットやテニスラケットなどがたくさん売られていました。ラケットは安い物から高価な物までありました。都会ではよくバドミントンをしている光景を見ましたが、田舎の方では見る事がほとんどありませんでした。これは貧富の差があるからなのかと思いました。

このような体験を通し、僕の外国に対する考えが変わりました。今までは他国と自分とはほとんど繋がっていないと思っていました。だけど、村の人々と接したり、ベトナムのいろんな所を見たりして、なんだか



自分のすぐそばに外国があると感じるようになり、きっとどこかで外国と繋がっていると思うようになりました。そのことを実感したのは、ベトナム北部荒地地域を見学した時でした。そこはダム建設で村人が川から山の方へ移住を強いられて、生活が苦しくなったそうです。その生活を少しでも楽にするために、ダムを利用して鯉の養殖をしようというプロジェクトがあると聞いて、僕の将来の夢がこういうところで叶えられるのではないかと思いました。僕の夢は、魚の養殖などをして世界中の水産資源を増やすことです。海沿いだけだと思っていたけど、ベトナムの山奥でも、そういった事が行われようとしていることに、僕はつながりを感じました。

今回の体験事業への参加は、ただベトナム人と触れ合っただけではなく、自分の将来についても深く考えることができました。最高の1週間を過ごせたと思います。いつの日か、またベトナムに行きたいです。



ベトナム滞在記

鹿児島水産高等学校 1年 大社 隆太郎

今回僕は、鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加しました。参加したきっかけは、母からベトナムに行ってみないかと勧められたからでした。それから、一回、二回と研修を重ねていきました。二回目の研修では、一回目の時の様な不安はなくなり、たくさんの人と話をしました。

そして、いよいよ24日の出発の日。たくさんの希望を胸に日本を出発しました。ベトナムへの乗り換えをする韓国ではベトナム行きを5時間待ち、その間にホームステイ先の家族に見せる歌の練習などをしました。韓国からベトナムへ行くと、日本とは大きく違っていました。道路には車よりもバイクの方が多く、クラクションの音がすごかったです。空港からホテルに向かい、ホテルに着くと疲れていたのですぐに眠りました。

朝起きて朝食を取りに行くと、バイキングだったのですが、たくさんのフルーツがあってとてもおいしかったです。特にドラゴンフルーツが僕は好きでした。ホテルを出てJICAベトナム事務所へ行き、ベトナムで行っている事業の話を知りました。総勢250人もの人がJICA関係者として働いていることには驚きました。やっとモー2村へと向かいました。モー2村は遠いのでバスの中で寝ていたのですが、モー2村へ近づくにつれ、道が悪くなって揺れがひどくなり寝ていられませんでした。モー2村へ着くとたくさんの村人たちが待っていてくれました。ホームステイ先の家族が来るまで、村長の家で待っていました。僕は少しでも村の人たちと仲良くなりたかったので、家から出て村の女性に自己紹介をしました。自分から指さし会話帳を使って話すのは簡単でしたが、相手の話していることを理解することは難しく、山下さんに通訳してもらってなんとか話をすることができました。しばらくしてホームステイ先の子どもが迎えに来てくれて家へと向かいました。家族のみんなと顔を合わせ自己紹介をすると、お父さんから順に名前を言ってくれました。自分のことを知ってもらうため、鹿児島のことや家族のことを紹介しました。ベトナム語で伝えるのは難しく、初日はとても緊張しました。

次の日の朝は子どもたちが起こしてくれ、一緒に朝ご飯を食べました。朝食には中華麺や竹の子のスープなどがあり、とてもおいしかったです。朝ご飯を食べた後はヒロさん（渡辺博人君）の家に行って、ヒロさんと村を案内してもらいました。村にはあちこちに果物がなっていて、子どもたちがスモモやリュウガンなどを取ってきてくれました。子どもたちと鬼ごっこをしてよく遊びました。子どもたちは山を登るのがとても速く、びっくりしました。



三日目は天然林回復計画の話聞きにケー村という村に行きました。話を聞く前に山登りをしたのですが、この山登りでとても疲れてしまい、話を聞く時はほとんど疲れていてどういう話だったのか覚えていません。ケー村を離れる前にしたバンブーダンスでは村の子どもたちと手を繋いで踊り、若返ったような気がしました。別れの時にはヒロさんがおじさんにキスをされていたり、有留さんが号泣していたりと大変でした。

四日目は研修や空港で練習してきた一発芸を見せる交流会がありました。ヤスさん（安田大地君）が一人で空手とマジックと2つもやり、かなり笑えました。夜はお別れ会をしました。僕はご飯を食べ終わると村長の家を出て外で子どもたちと遊びました。ヒロさんは僕よりも先に外へ出ていて女の子を口説いていました。そこへJICA専門家の田島さんが入ってきてベトナム語の口説き文句をヒロさんに教えていたりしました。パーティーの後のキャンプファイヤーではみんなで「ホーおじさんの歌」を歌いました。こうやってみんなで騒いでいると次の日の別れがどんどん辛くなっていくように感じました。

モー2村最後の日、お母さんがお土産に竹で作った小物入れやスカーフをくれました。村を出る時間がきたのでお父さんやおばあちゃんに別れを言い、お母さんと子どもたちとバスの所に向かいました。僕たちが着いたころにはみんなもう集まっており、目に涙を浮かべていました。最後別れる時、一発芸で使った耳と帽子を子どもにあげました。

その後はホテルへ向かい、夜にJICA関係者と懇親会をしました。ここでも田島さんは自分は「明日のジョーだ」などと言い、面白かったです。次の日には観光をして市場にお土産を買いに行きました。ちゃんと数字の勉強をしていたので、スムーズに買い物できました。夜になってから飛行機に乗りました。台風の影響でなかなか着陸できず、飛行機の中ずっと大変でした。それから鹿児島に着いた時は今までの疲れが一気に襲ってきました。最後にみんなで一言ずつ感想を言っていました。

今回の体験事業では、とても素晴らしい体験ができたと思います。この経験をこれから人生に役立てていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

ベトナムのすがお

串木野高等学校 1年 有村 綾香

今、頭の中に浮かんでくるのは楽しい思い出ばかりです。この体験事業に参加することが決まって説明会で研修の日程を聞きながら、私はすっかり自信をなくしてしまいました。初めて会った人と友達になれるのか？ベトナム語は？飲み水は？全てが戸惑いでした。

私のベトナムのイメージが、暗い・汚いというマイナスのイメージが強かったからかもしれません。研修を通じて団員の中にも話せる人が出てきて、不安と期待の入り混じった気持ちでベトナムへと出発しました。

ベトナムに着いた瞬間びっくりした事。それは夜中なのにたくさんの子供達がいる、裸足で私たちのことをじーっと見ていたことでした。私の荷物を盗られるのではないかと思うほど、子供達の視線が怖かったです。日本の安全性を実感しながらも、これから一週間のベトナム生活が少し不安になりました。しかし、ホストファミリーの方は笑顔で迎えてくださり、心強く感じました。空港で見た人たちの視線とは全く違う温かいまなざしでした。いよいよホームステイ先に到着してまず驚いたのは、屋根がワラだったことです。虫が出てきたりゴキブリが飛んでいたり、最初は怖いことの連続でしたが、困ったことは風呂とトイレです。使い方が解らずに聞こうと思っても言葉が通じなくてどうすることもできませんでした。「もっと勉強してくればよかったな」と後悔しました。言葉の壁に苦労しました。最初のうち私は笑ってごまかしていたように思います。でもこのままでは駄目だと思い、指さし会話帳を使って自分の思っている事を伝えるようにしました。思っていることが、相手に解ってもらえると嬉しくなってきた、会話がたくさんできるようになりたいと思うようになってきました。村の人と交流する機会もありました。ゲーム等はありません。山に行ったり散歩をしたり、ずっと一緒に過ごしました。私は折り紙でまりを作ってあげました。小さな子供達が私に近寄ってきてくれることが嬉しくて、頑張って作りました。

私が頼りないこともあって、ホストファミリーのお姉さんや私より小さな子供達が、私のことを気遣ってくれました。道を歩く時に手をかしてくれたり、言葉で伝えなくても、さりげなく優しく接してくれて、私はベトナム人の優しさに触れるうちに、私が今まで「暗い」「汚い」と思っていたことが偏見だったことに気



付かされました。偏見を持つということは相手に失礼だと思います。私はベトナムで出会った人々を尊敬しています。朝早く起きて田んぼに行き稲を植えて川で洗濯する姿を見て、私はすごいと思いました。毎日の生活が大変なのに、あんなに優しく接してくださり、笑顔が素敵でした。ホストファミリーのお母さんから手紙をいただきました。「家族の全員が綾香さんを家族の一人のメンバーのように思っています。お互い言葉を勉強して理解して、その言葉で会話しましょう」と書いてありました。何もできなかった私のことを思ってくくださったホストファミリーのみなさんに出会ったことに感謝しています。私は村の人たちがずっと元気でいてほしいです。治療費が無いために病気になったら死ぬしかないような話を聞きました。病院へ行く途中で道端で倒れてしまう人もいます。信じられないけど、これが現実です。

私はこれから、いろいろな事に興味を持ち勉強して将来は、自分が知った世界を皆に伝える仕事につきたいと思っています。外国のこと、そして日本のことをたくさんの人に知ってほしいと思います。偏見でいっぱいだった私はこの体験を通じて、相手を思いやる気持ちがあれば、気持ちは伝えられることを知りました。ベトナムに行ってきたです。ありがとうございました。



(本人：右)

体験事業を終えて

申木野西中学校 3年 平石 敬乃

私がこの体験事業に応募した動機は、ベトナムという外国を見て、聞いて、肌で感じることで、青年海外協力隊を視察することで、国際協力への意識を高めるためです。

2回の事前研修では、一緒に行くみんなと仲良くなることができました。1回目の研修の時は、自己紹介や国際協力についてのお話などであっという間に終わってしまいました。でも、2回目1泊2日の研修では、ベトナム語講座や協力隊OBの経験談などスケジュールをこなすうちに、自然と団員のみんなと話すようになりました。ベトナムについても知るようになりました。また、アジア・太平洋農村研修センターはとても使いやすく、ご飯もすごくおいしいところでした。この2回あった実りある研修を経て、ベトナムに行く準備が整えられました。

ベトナムの第一印象は、暗いということでした。雨が降っていたし、日本と違って電灯があまりなかったからです。文字がベトナム語なのを見て、ベトナムに来たんだなあという実感が湧きました。

2日目にJICAベトナム事務所へ行きました。詳しい説明を聞き、改めて協力隊の人々はすごいなと思いました。バスで移動を行ったのですが、バイクの数がすごく多かったです。ヘルメットも被っていないし、2人乗りは当たり前という感じでした。また、信号も少なく事故がおきるんじゃないかと心配しました。昼食を食べた後、ホームステイをするホアビン省へと3時間ほどかけて向かいました。都市部を過ぎると次々と景色が変わり、色々なベトナムを見ることができました。牛が道路を横断したり、田んぼで群れているのにすごく驚きました。ほとんどの人が玄関前のいすに座って話をしていました。

私たちがホームステイしたモー2(ハイ)村は、本当に山奥にありました。周りが森に囲まれ、小さな川が流れる自然がいっぱいの所でした。ホストファミリーは、女性三人家族です。言葉が分からない私たちを笑顔で迎えてくれて、すごく安心しました。

3日目はホストファミリーとずっと一緒にいました。家が高床式で木造建築なうえに茅葺き屋根の家だったので、新鮮で小さなことにも驚きました。家族と過ごす時間はあっという間で、一日がすごく短く感じられ



(本人：右から2番目)

ました。

4日間という短い期間を一緒に過ごしましたが、伝えたい事が伝わらない事があったりしました。でも、分かるようになってくれたり、自分から分かってもらおうとすることはとても楽しくて嬉しかったです。ホームステイでは、もちろん言葉を理解して親しくなるのも大切だけど、その生活をして慣れることでもっと親しくなることを学びました。とても親切にしてくれた家族がとても好きだし、感謝の気持ちは絶対に忘れません。

事業はホームステイだけでなく、色々なプロジェクトの視察もしました。プロジェクトに関わっている人たちは1人1人が輝いていました。すごく尊敬しましたし、羨ましかったです。私も、一生懸命な人を見習いたいと思いました。

7泊8日の体験事業を経て、国際協力というのはただ協力するだけじゃなく、人と人の繋がりを強めるものだと思います。

この貴重な体験をさせていただけたことに本当に感謝しています。この事業で体験したことを胸に、これから人生の選択をしていきたいと思います。

ベトナムに行くことができ本当に良かったです。ベトナムのことが大好きになれてよかったです。



私たちの訪ねた村

加治木高等学校 2年 有留 小百合

私たちはベトナムで2つの村へ行きました。ホームステイでお世話になったモー2(ハイ)村,そしてJICAが技術協力をしているケー村です。私はこの2つの村でとても大切な思い出を作ることができました。

まずケー村についてです。ケー村では「ベトナム国北部荒廃流域天然林回復計画」という技術協力がJICAにより行われていました。どのような協力がというと、焼畑によって開かれた土地に、再び天然林を回復させるというプロジェクトでした。その現場は山の上にあるので山に登らなければいけませんでしたが、しかし私は、体調が優れず、とても登れるような状況ではありませんでした。私は下の村で待っておくか、山に登るか聞かれましたが、私は迷わず登ることを決めました。そこまでは良かったのですが、登るとすぐに体が重くなりました。それを見かねた通訳のフンさんとケー村の村長さんにずっと両脇を支えていただき、何とか途中の村まで行くことができました。私はとても大変な思いをさせてしまったのに、2人は嫌な顔もせず支えてくれたので本当に嬉しかったです。ベトナムの人たちの優しさが身にしみました。

私はそのプロジェクトの現場視察をすることができませんでした。しかし、説明を受けると、なぜ村人たちが焼畑をしなければならない状況になったのかがわかりました。現地の人たちと一緒に原因を追求したり、一緒に活動したりしている協力隊の人は目が輝いていてカッコよかったので、協力隊という仕事に私は魅了されました。

ケー村を離れる前に、村人たちと何回も何回もバンブーダンスをして楽しみました。その時は、本当に時間を忘れて踊っていました。その後、村の子どもたちが私たちにお別れの歌を歌っている時に、私は涙が出てきてしまいました。この日は体調の面で本当にいろいろあったのですが、村人たちの優しさや笑顔に支えられたので、体調も良くなり、楽しい一日を過ごせました。私はこの一日の出来事をずっと忘れることはないでしょう。

次にモーハイ村です。私はホームステイをとても楽しみにしていました。村は豊かな自然に囲まれていて、夜は星がとてもきれいだったのでよく覚えています。蛍も見ました。



(本人：中央)

私のホストファミリーは、お父さん、お母さん、8歳の女の子フエ、3歳の男の子のバオの4人家族でした。私は2人の子供たちと本当によく遊びました。モーハイ村にいるときは、ほとんど一緒だったように思います。家の中で遊んだり、川へ行ったり、他の家に遊びに行ったりしました。お父さんは日本から持ってきた写真を見せると喜んでくれました。お母さんは若かったので、お姉さんという感じで、お母さんともいろいろ話しました。私には記憶に残っていることがあります。ベトナム語の指さし会話帳でお母さんと会話していた時のことです。『盗まれた』や『スリ』、『なくなった』という言葉を目指し、「ノー、ノー。この村ではない」と言っていました。確かにそうだろうなあと私は思いました。なぜなら、村の人たちは本当に心が温かいからです。モーハイ村では、とても平和な時間が流れていました。私はそんなモーハイ村が大好きになりました。

4泊のホームステイもあっという間に終わり、モーハイ村でもお別れの時間がやってきました。家を出る時から涙が出てきました。お母さんとフエが泣いたので、ますます涙があふれました。私は「また旅行でおいで」や「また会いましょう」と言われた言葉を実現させたいです。

私は本当にこの事業に参加してよかったと思います。このベトナムでの思い出は一生の思い出となりました。



ベトナムで出会い,学んだこと

川辺高等学校 2年 永家 賢人

僕は、この青少年国際協力体験事業に参加したことによって、青年海外協力隊の隊員に出会い、僕を快く迎えてくれたホストファミリーに出会い、ベトナムという国に出会えたことで自分を見つめ直す良い時間となりました。

ベトナムでのホームステイは、首都のハノイから西南へ70キロメートル行った所にあるホアビン省のモー村という所でした。そこは、山に囲まれた農村地帯で家も高床式の家ばかりでした。ホストファミリーと対面した時は、緊張してうまくコミュニケーションがとれなくて困りましたが、ホストファミリーがそんな僕に優しく接してくれた時は嬉しかったです。

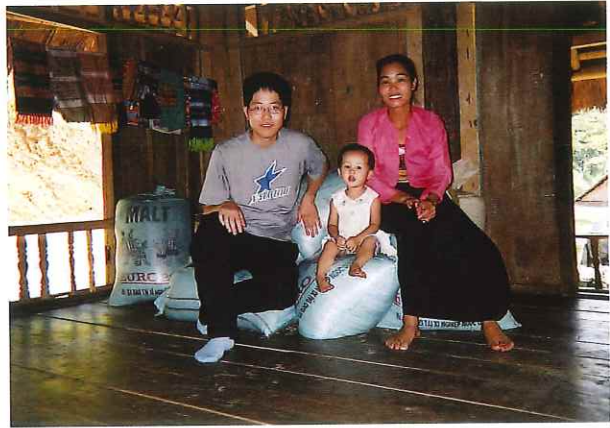
翌日はホストファミリーと一日過ごすことになっていて、朝早くから畑仕事の手伝いをしました。畑仕事は、田んぼの壁を高くする仕事や草取りなどをしました。このとき僕は、ホストファミリーのお父さんが耕すのを見て驚きました。日本であれば田んぼを耕すときにトラクターなどを使いますが、この村の人たちは、昔の日本のように水牛を使っていました。日本では、おそらく実際に使うところは見れないと思い、貴重な体験ができました。

ホームステイ3日目は、朝からJICAが行っている北部荒廃流域天然林回復計画の現場を視察しました。この計画が行われている場所は、町から離れた山奥の村でバスを降り、そこから山を登ったところにありました。そこには、協力隊の隊員や現地の人たちが植えた木が何本もありました。こんな山奥にまでJICAが支援していることに、本当に驚きました。

4日目は、午前中ホアビン省の保健局や病院に行き、午後からはモー村の中学校で交流会をしました。こうして、毎日とても楽しく過ごしました。

そして別れるときには、とてもつらく、悲しかったです。今回の五日間という短い期間でしたが、このホームステイで多くのことを学ぶことができました。日本との生活・文化の違いだけでなく、言葉の通じない相手でも、何か通じ合うものがあり、理解し合えるということです。そしてこれは、国際協力にも同じことが言えると思いました。

国際協力とは、貧しい国や地域の人々を助けることではなく、現地の人々と共に地球を育てること



です。僕は、国際協力については、あまり知りませんでしたが、協力隊の隊員たちの話を聞いて、現地では多くの人たちが助け合いながら共に活動していることを知り、共に地球を育てるという言葉がぴったり当てはまることを痛感し、また協力隊の活動の大きさを感じました。

このように、今回のこの事業とベトナムという国で、僕は相手を認め、十分に理解することの重要性を知り、また人の心の温かさを感じることができました。そして、この経験をこれからの自分の目標に生かせるように努力したいと思います。

私の将来の夢

鳳凰高等学校 1年 蔵元 みえ

私が今回、この体験事業に参加したきっかけは担任の先生の勧めからでした。看護師になるために一生懸命勉強して看護学科のある鳳凰高校へ入学したものの、専門教科はとても難しくて授業についていけなかったり、定期考査などで納得のいく点数が取れなかったりして、「本当に私は看護師になれるのかな・・・」と不安になったりしていました。また、テストで納得のいく点数が取れても「もしも国家試験に合格して看護師になれたとしても私は何がしたいのだろう・・・。看護師になるために何を目標にしていけばいいのだろう・・・」などと数え上げればきりが無い程、たくさんの不安を抱えていました。そんな時に勧められた今回の体験事業の話。最初の頃はあまり深く考えることもなく、ただ「ホームステイかぁ。いい思い出ができるかな。」と気軽に応募してみたのです。数回の研修も済み、刻一刻とベトナムへ出発する日が近づいてくると何人もの周りの人達から「ちゃんと生きて帰って来てね」と言われました。その理由の多くが、発展途上国のため衛生的に整っていないからということや、経済的に貧しくお金目当てで日本人に危害を加えるイメージがあるからというものでした。周囲の人たちに散々脅かされ自分自身「大丈夫かなぁ」と不安がつりながら、私はベトナムへ旅立ちました。

飛行機・バスを使っての長時間移動。道とは言えないような道を進むこと約3時間。やっとホームステイ先の「モー2（ハイ）村」へ着きました。バスを降りた私の目に飛び込んできたのは萱葺きの家、田んぼ、裸足で駆け回る子供達のすぐ隣を悠然と歩く水牛。何十年も昔の日本の姿がそこにはありました。その場に茫然と立ち竦む私は、例えようの無い大きな不安が襲ってきたのを感じました。村長さんの挨拶も終わり、それぞれのホームステイ先へと案内されました。私がお世話になった家は、父、母、5歳の娘フェアの3人家族でした。練習した自己紹介が済むとお茶を勧めてください、ベトナム語の分からない私に身振り手振りでコミュニケーションをとってくれたお陰ですぐに緊張もほぐれ、積極的に話しかけることができました。その他にも村を案内してくれたりサトウキビのジュースを飲ませてくれたりと、とても親切にしてもらい本当に感謝しています。



またホアビン市の病院見学では日本の病院がいかに恵まれているかを実感しました。この病院ではベッド不足の為、1つを2人で使用していたり、個室を数人の患者で共用していたりして、日本では絶対にありえない状態でした。衛生的にも物質的にも整っていない為に命を落とす人々も多くいることを知り胸が痛みました。看護の勉強をしている私にとって病院見学はとても多くのことを考えさせられました。

私は今回の体験を通して将来の夢と目標ができました。それは将来必ず看護師になって青年海外協力隊として再びベトナムへ行くことです。そして日本の看護の観点とベトナムの看護の観点双方から見て、受け入れられるものは受け入れてもらって、逆に日本に受け入れるものは受け入れる。そうやって少しでも多くの苦しんでいる患者さんの回復の手助けをしてあげたいと思います。そのために今から、専門教科の勉強を頑張っ行ってきたいです。

私が今回このような素晴らしい体験をできたのはモー2村のみなさん、実行委員会の方々、支援して下さった知覧町教育委員会の方々、送り出してくれた両親、同行者の方々、そして一緒に思い出を作った団員のお陰です。本当に心から感謝の気持ちでいっぱいです。この思い出は一生忘れる事なく将来役立てていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



(本人：左)

私のベトナム体験記

川辺高等学校 1年 西野 栄梨花

「私たちのかわいい家族。」ホストファミリーからの手紙の最後の一文である。私が今回の体験事業で一番心に残っているのは、大好きなもう一つの家族とすごした四泊五日だった。

私がこの体験事業に参加しようと思ったのは、6年前に兄が同事業に参加しタイに行ったのがきっかけだった。父はタイから帰ってきた兄の成長を見たからか、私が参加することを快く了解してくれた。

いざ、ベトナムへ！！とは言っても、私はそこまで緊張はしていなかった。

空港を出た瞬間、ベトナムという国の第一印象はとにかく恐ろしかった。夜の真っ暗な時間帯だということに、小さな子供たちが普通に座っている。しかし、現地の人々にとって私たちが見ているものは日常であった。ここから、私の異文化体験が始まったのだ。

今回行ったモー村で一番驚いたことは住居である。高床式のカヤブキ屋根。昔の日本のようなこの村は、どこか懐かしい感じがした。私のホームステイ先の家族は、正直どこまでが家族なのかが分からない。でもそれは、今となっては、村全体が一つの家族のようなこと証だった。ベトナム語での自己紹介を済ませた私は、温かい家族に迎えられ、日本や鹿児島、私の住んでいる知覧町の話をした。しかし、その時に一番の問題だったこと。それは言葉の壁である。事前に配布された会話帳には3000語。限られた語数の中、困っている私を家族は一生懸命理解してくれようとした。私はその気持ちが嬉しかった。

ホームステイ2日目には、村の田植えを手伝った。私は日本でも毎年田植えをしてる。一番の違いは、機械の有無である。日本では専用の機械を操作するだけで、ほぼ作業は終る。しかし村には、もちろん機械なんて物はなく、田んぼを耕すのは水牛の仕事。何日も何日も田んぼに通い一束一束を手で植える。この時点で日本がどれだけ豊かな国であるかを実感した。

私の住んでいる町と比べると、モー村には何も無い。炊飯器や冷蔵庫、クーラーなんてもってのほか。でもこの村には、日本にないものがたくさんある。自然の中での笑顔、村の人々がみんな生活しているということ。私はその村の一員になれた。そして他の13人も同じだ。

モー村に出会い、村の人々に出会い、人々の優しさ



(本人：中央)

に触れ、私にはもう1つの家族という宝物ができた。いつの日にかまた会えることを約束した。この約束が現実になることを願っている。

私にはまだ将来の夢というものがない。今回の体験事業が、そんな私の世界への視野を広げてくれた。人と触れ合い、出会えたことの大切さを胸に、日本を見つめ直し、世界を見つめ直し、国と国との架け橋になれるようにこれから努力していきたい。

そして今回の体験で出会ったホストファミリー、村の皆さん、団員のみんな、同行者の方々、町のみなさん、本当にありがとうございました。



忘れたくないベトナムでの日々

岩川高等学校 3年 渡辺 博人

僕は日頃から国際ボランティアというものに関心を持っていたので、学校に今回の青少年国際協力体験事業のチラシが掲示されているのを見て、青年海外協力隊がどのような活動を他の国々で行っているのか直接自分の目で見てみたいと思い応募しました。だから、当初はベトナムという国には全然興味がなく、ベトナム戦争があったことや社会主義国であることから、あまり良いイメージがなく、この国を訪問することには少し抵抗がありました。しかし、ベトナムで時を過ごすうちに、この国に対する思いが少しずつ変わってきました。

ベトナムの空港に着いてハノイ市内までバスで向かう途中窓から外を見ていて、暗くて周りがよく見えなかったせいかわかりませんが、日本とあまりかわらないなという印象を受けました。その後、ホテルに一泊して翌朝ホテルの外に出てみると、道路を走っているバイクの量の多さに驚かされました。交差点には信号がなく、みんなヘルメットをつけずに2~4人乗りだったので、事故が起きるんじゃないかと思いドキドキしながら見ていました。この日の午前中はJICAベトナム事務所へ行き、ODAはお金を融資してその国の発展を助ける、また、JICAは無償資金協力をする機関であるというような内容の話聞き、午後からはいよいよホームステイ先、ハノイから南西に2~3時間行ったところにあるホアビン省のモー村というところに向かいました。村に着き周りを見渡して、まず目に入ったのが初めて見る高床式の家でした。それを見ると、4泊5日の村でのホームステイが楽しみになってきました。

僕のホームステイ先の家族は、お父さんとお母さん、そして甥の7歳の子がいました。初めて会った時、自己紹介をするのにとっても緊張したけれど、慣れてくると指さし会話帳を使い、なんとかコミュニケーションが取れるようになってきたのでホッとしました。家族もみんな親切で心の温かい人たちだったので安心しました。夜になり、お風呂に入りたいと言うと、その家の子どもタイン君がすぐ近くの川に案内してくれて、お風呂は川なんだなと驚きつつも、一緒に水遊びをして汗を流しました。

翌日、5時前には目を覚まし外を見てみるともう活



動している人たちがいたので、ベトナムの朝は早いなと感じました。ご飯を食べた後、洗濯をしようと川に行き、少し戸惑いながら服を洗っていると、それを見ていたお父さんが手伝いに来てくれました。洗濯後は本当は農作業の手伝いだったのですが、僕のホストファミリーは農作業をやらなかったもので、子どもたちの案内で村を探検することになり、道とは思えない道を通ったり、池の中に入りヒルに血を吸われたりしながらヘトヘトになるまで歩かされました。その中で子どもたちが梨に似た味のする果物を採ってきてくれたりしてとても楽しい時を過ごすことができました。

このような時間を過ごすうちに本来の目的であった天然林回復のための話やベトナムの現状を学ばなければならないという事が頭から離れてしまっていました。でも、ベトナムで初めてする貴重な体験やホストファミリーを通して、人と触れ合うことによって得られる他人への思いやり、言葉が通じなくてもそれを感じさせない寛大な心という、今日本の人たちが少しずつ失いかけているものを学ぶことができました。

今回の事業で当初持っていたベトナムへのおかしな偏見を捨てることができ、ベトナムにいつか住んでみたいと思えるほど大好きになりました。異文化と交流したことの無い人はぜひ外国に行き、日本では味わえない体験をして欲しいなと思います。



(本人：写真中央帽子着用)

世界が広がった夏

鹿児島玉龍高等学校 2年 大久保 彰子

7月24日～31日の一週間、私は初めて海外を体験した。向かったのは、世界地図を広げて指差してみるといわれても戸惑ってしまうような国、ベトナムである。国名こそは知っているものの、調べる前の私は「発展途上国」ということしか知らなかった。

ベトナムでも大都市であるハノイ市は、フランスの植民地であった影響で、フランス風の店が所狭しとならんでいた。私たちがホームステイをするのはモーハイ村という農村だったのだが、私はこの時点では、ステイ先もフランス風の建物なのだろうと、少しの期待と憧れを持った。

しかし、バスに揺られて2時間弱。着いたモーハイ村は、まるで遺跡を見学に来たかのような所だった。家の素材は木や竹で、高床にわらぶき屋根という、市内ではちらりとも見かけなかったものだった。のどかな田園風景が広がり、舗装されていないあぜ道がどこまでも続いていた。周囲の山々は、まるで都会の風が入ってこないように村を取り囲んでいた。私の憧れたフランス風の建物は影も形もなく、市内とのギャップも激しかったので、「本当にここでうまくやっていけるかな」と、かすかな不安がよぎった。

しかし、家の中は案外涼しく、とても過ごしやすいかった。人々は道ですれ違う度に、笑顔で「シンチャオ（こんにちは）」と言ってくれた。簡単な自己紹介と挨拶くらいしかベトナム語を話せない私たちを敬遠することもなく、実に積極的に話しかけてきてくれた。時に身振り手振りで伝えようとして笑い合った事もあった。

特に子供たちは名前をすぐ覚え、何回も何回も呼んでくれたのですごく嬉しかった。手をつなぐと色々な場所へ連れていかれた。ぬかるんだ地面に足を取られながら山を登り、グアバの実やジャックフルーツを食べ、水浴びに川へ入り、と、久しぶりに自然と遊んだ。夜はご飯を食べた後に、友達の家で折り紙やリコーダーを教えた。

国境を越え、言葉の壁さえも越えて、人の優しさは伝わるものだと実感した。たくさんの優しさをもらったから、別れる時は涙が止まらなかった。もっとお礼をいいたかったのに、何もいえなかったのが歯がゆい程だった。



(本人：右)

今回の事業に参加して、私はベトナムの印象、そして外国の印象が変わった。私は最初ベトナムに対して、良いイメージを持っていなかった。調べてみると、戦争での枯葉剤の影響や、麻薬などが広がっていると分かったからだ。しかし、日本語の通じない異郷の地で、人々はとても優しく大らかに私たちを受け入れ、笑顔で見送ってくれた。私が考えていた「ベトナム」はどこにもなかった。認めたくはないが、私がベトナムに抱いていたイメージは、確かに「偏見」だったのだ。

このことを通して、私は日本で知る外国はとても小さいものだと感じた。自分自身が、外国の空気の中で身をもって人々と交流し、異文化を知ることが「本当の外国」を知ることで私は考える。異文化を体験するのは戸惑うことも多いだろう。しかし、そこで支えてくれる人々の笑顔はとても素朴で、綺麗だ。日本人が文明や科学の急成長ののちに失ってしまったものがベトナムにはあった。

今年の夏休み、私の中で外国という存在が身近になり、もっと色んな人に会いたいし、どんな人がどんな暮らしをしているのか見たいと思うようになった。

確実に私の世界は色付き始め、広がったのだ。

ベトナムで学んだこと

鳳凰高等学校 2年 友井川 美都

今回一週間、ベトナムで日本とは全く異なった生活をする中で私は多くのことを学ぶことができました。それは大きく二つに分けられます。

一つは自己管理をしっかりするという事です。これはよく原さんに言われたことで、パスポートやお金をはじめとする貴重品の管理はもちろん自分の体調管理も入ります。日本にいる時は親に任せていてばかりだったのと慣れない環境を理由に私はしっかりできていなかったと思います。バッグを開けっ放しで席を離れたり、手を洗わないまま果物を食べてしまったりと、今考えれば当たり前の事です。これからはベトナムでの出来事をちょっと思い出して、日常の生活に活かしていきたいと思います。

そして二つ目は、国や人、物をイメージで判断し差別してはいけないということです。私はこの体験事業に参加できると通知が届いた時にとても嬉しくて、事前研修も楽しみにしていました。しかし、事前研修の時に、家にトイレがないかもしれない、トイレトペーパー持参、虫除けスプレーが必須アイテム、バッグは鍵付きのものが良い、お金を払う時は相手にお金を見せてはいけないなどと説明を受け、ショックと同時にベトナムの悪いイメージばかりが膨らみました。友人や親にこのことを話すととても驚き、キャンセルできないの？と聞かれキャンセルを考えたこともありました。ベトナムでホームステイをしたい気持ちもありましたが、はっきり言ってベトナムに行く前の私のベトナムのイメージは最悪でした。しかし、実際に四泊五日のホームステイを体験し、自分の考えが全く逆に変わる結果となりました。言語での苦勞はありましたが、村の人々は皆私たちに笑顔で接してくれて、私たちが過ごしやすいようにと影で努力をし、私たちを支えてくれました。私のステイ先のお父さんとお母さんは共働きで、二人が家に長くいる事はあまりありませんでした。二人とも疲れた顔で夕方帰ってきます。一日中働いて顔に出ている以上に疲れているはずなのに、そんな表情を全く見せず夕食は何が食べたいと聞いてくれます。子どもたちは私と会話をしようとベトナム語会話帳を取り合いっこしながら話しかけてくれました。

二日目には日本から来た私に南国のフルーツを食べさせようと隣の村まで案内し、たくさんの種類のフル



ーツをすすめてくれました。私はベトナムの文化に驚くだけでなく、ベトナム人の温かさにも驚かされっぱなしでした。

今ではホームステイする前の自分の考えがウソみたいいです。家族と別れたバスの中で私は、ベトナムに行ったからこそ知ることのできたこのことを、自分の周りの人々に報告し自分自身の為にもう一度振り返り、考え方・物の見方を変えていこうと思いました。

他にも学んだことはもちろんたくさんあります。自分が勉強している看護の分野では、ベトナムの医療現場の説明を受け、実際に病院見学をしたり、元青年海外協力隊の山下さんと話ができるなどの貴重な体験ばかりでした。また、現在専門家、青年海外協力隊として活動している橋口さん、福山さん、門野さんのベトナムでの暮らしぶりや仕事、日本についてなど懇談会で話を聞かせてもらい、青年海外協力隊へのイメージも変わりました。

今回ベトナムに行って私は二つの大きな事を学んだと同時に、自分の進路を真剣に考えようとする第一歩も踏み出せたと思います。ベトナムでの経験を忘れず、今後の生活に活かしていきたいと思います。



他の国の文化を理解する

青戸中学校 1年 新原 夏帆



私は今年の7月24日から31日まで、青年海外協力隊の活動現場を見る体験事業でベトナムに行ってきました。

私がこの体験事業でベトナムに行こうと思った理由は、小学生のころ図書館でベトちゃんドクちゃんの本を読んでから、ベトナムに一生のうちに一回は行きたいと思っていたからでした。

将来、私は医療福祉関係の仕事につきたいと思っています。ですから、ベトナムに行けたら、いるかどうか分かりませんが、障害のある子の家にホームステイして、その子の家族がその子に対してどのような接し方をしているかなどを見て勉強したいと思っていました。障害のある子はいませんでしたが、ベトナムの病院を見られたりしたので、とてもよい経験になりました。

私は、ベトナムに行き、一度は焼いた森を元にもどそうとするプロジェクトのことや国際協力のことなど、いろいろなことを見たり、感じたりして学ぶことができましたが、ベトナムに行き、日本に帰ってきてから今一番考えることは、他の国の文化を理解する異文化理解についてです。

海外に行くのは今回のベトナムが初めてですが、ベトナムから日本へ帰ってきてみると、私にとってベトナムは、海外ではなく第二の故郷のように感じられました。なぜなら、人がとてもあたたかく、現地の人の笑顔や笑い声など、今の日本にはないようなやさしさがあったからです。また、村の子どもたちと一緒に遊んだり、ベトナム独特の踊りをしたり、ホームステイ先の人と会話をするなど、楽しいことやうれしいことが、ベトナムではたくさんありました。

ベトナムに行き私は、他の国の文化を理解するのはとても難しく、大変なことだと思いました。「異文化理解」と、とてもカンタンに言いますが、実際にはとても難しいことでした。このことは、四日間、高床の民家にホームステイしてみてもよくわかりました。

まず、「思うようにことが通じない」。これが一番大変でした。また、生活習慣の違いです。生活習慣はかなり違って、朝五時に起きて、夜九時に寝るといふものです。お風呂はシャワーもなく、水で熱さを調節したら一杯のお湯を手おけですくって自分の体にかけて頭などを洗います。これは、ふだんお湯をたくさん使っている私には、とてもきつかったです。

そして、洗たくは、川をわたって、洗たくをする所まで歩いて行きます。川をわたる時に長いズボンをはいていると、ズボンをまくっていてもズボンがさがってきて、ぬれてとても大変でした。あと、生水が飲めないということに少しおどろきました。

こういう時、私は日本がどれだけ恵まれている国なのかがよくわかりました。そして、日本人には常識でも現地のベトナム人には通じない、または理解しがたいということもあり、その逆もありました。この時私は、日本とベトナムの間に少しかべがあるように感じられました。ですが、そのかべをこえるから「異文化理解」だということも感じました。異文化を理解するのはとても難しかったです。ですが、難しい分、それだけ異文化を理解するということはとても大切なものを感じられました。

将来私は、医療福祉の仕事につき、青年海外協力隊の一員として、いろいろな国へ行き、自分の目でその国の文化を見て、良い所は良いと認め、それぞれの国の文化を知り、理解していきたいと思っています。

事業を終えて

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
事務局長 **弓場 秋信**

結団式で団員1人1人がベトナム語での自己紹介と、この事業参加の動機・抱負を述べる姿は頼もしく映ると同時に、団員の思いが適うような環境の提供と、適切なアドバイスに心がけようと改めて自らに言い聞かせベトナムへと向かった。

ベトナムはドイモイ(刷新)政策導入以来経済の近代化に取り組んでいるが、最近では勤勉な国民性と中国経済の補完地として注目され経済成長が加速してきた。日本からの政府開発援助(ODA)もインフラ整備等のハードから保健衛生、教育、環境、貧困対策などのソフト部分まで多岐に亘っている。その一翼を担うべく青年海外協力隊員の派遣が開始されて10年に当たる今年、ベトナムで展開される「草の根の国際協力」の活動現場を訪問し協力隊員や専門家に直に触れる事は、団員にとって大きな刺激と国際協力の理解に寄与する。首都ハノイから南西に約70km、4日間ホームステイする少数民族のモーハイ村は、水牛が働く棚田とカヤブキの高床式住居が点在する自給自足型の村であった。到着早々に村長から「最初は14軒を民泊先として用意していたが人民委員会(村役場)よりトイレが備わった8軒しか許可しない」との事。村民の意思ではなく行政からの命令である為に村長に「私達はこの地の生活環境を受入れ、異文化体験を通して国際理解を深めたい」と話しても進展せず、人民委員会に出向き委員長との直談判となった。誇り高いベトナム民族にとって、トイレが無い家に外国人を宿泊させる事は恥と感じての措置と思い、プライドを傷つけないようベトナムに対する思いを述べながら交渉に当り16軒での民泊が可能になった。

生活環境の落差や言葉の壁と格闘しながらのホームステイ期間中、団員は活動現場訪問でベトナム最大の水力発電所が稼動しているダム周辺の荒廃流域天然林回復プロジェクトの現場視察と対象村民との交流、そしてホアビン省保健局では保健行政についての説明を受け総合病院の視察を行った。それらの現場での団員の質問は、自分が将来協力隊員として活動する事を想定した真剣み溢れる内容であった。また後日の鹿児島県出身を含む協力隊員との懇談会では、自信に満ち輝いている隊員に種々の質問を浴びせ、何かを吸収しようと熱いトークが続いた。



なぜベトナムの中でも辺境の少数民族村に4泊も滞在するのか、と質問していた村人も私達の訪問目的を理解し、言葉での意思疎通の困難さを「優しさと思いやり」を持って家族の一員として受入れてくれた。また警察・共産党青年同盟関係者が、我が家に同居して皆の安全に目配りをしていた。そんな村人に支えられ多くの果実を得る事が出来た。

団員はベトナム滞在中で多くの事を学びながら、人の本当の優しさに触れ、自分の将来の進路をも考える機会となりました。1週間の中で日々成長する団員の姿・言動に驚嘆と感激を覚え、この経験が将来国内外で生かされることを切望いたします。

最後に、私達を温かく迎えてくれたモーハイ村の皆さんへの心からの感謝と開発途上で汗を流す青年海外協力隊員の益々のご健勝を祈念致します。

ベトナム訪問に同行して

(財)鹿児島県国際交流協会
総務企画課長 増田 彰一

「まさに日本の原風景だ。」ホームステイをさせていただいたモー^{ハイ}2村の第一印象でした。

当初、私は、ベトナムについて、アメリカ製ベトナム戦争映画の影響で、鬱蒼としたジャングルとこの上なく蒸し暑い熱帯気候のイメージを持っていました。しかし、事前研修や旅の本などを通して、ベトナムは、日本との多くの共通点があり、特に北部は、四季があり、地方の集落は田園風景が広がり古い日本に似ているとの情報を得ることができました。

バイクの警笛がけたたましいハノイを離れ到着した、少数民族ムオン族の平穏な村、モー^{ハイ}2村の風景は、まさに日本の原風景、又は、現在の地方にもある集落風景を見るようでした。食事についても、日本食が恋しくなるのではと少々準備して行きましたが、それを使う必要はありませんでした。気温35度を超える日中でも高床式の家の中は涼しく快適で、明け方には寒くて毛布をかぶったほどでした。ホストファミリーは親切で、親しく接していただき、イラスト入りの会話帳を使い、会話にならない私のベトナム語にも辛抱強くお付き合いいただきました。とても感謝しています。

私は昨年度からこの事業に関わってきましたが、昨年度のマレーシア訪問に参加した団員が出発前に比べ大きく成長して帰国したということ同行者から聞き、また、報告書でも読みました。今回の団員の成長を楽しみにしての参加でした。

モー^{ハイ}2村では、到着前や到着時には不安げな様子をしたり不安を漏らしたりする団員もいましたが、翌日には、ホストファミリーと、会話帳やジェスチャーを駆使して交流を深め、笑顔で連れ立って村の散策や農作業の手伝いなどを行っている団員の光景を至る所で目にできました。特に、村の子どもたちとはどの団員もすぐに仲良くなれたようで、中には村の子どもたちを大勢引き連れて、笑顔で村を散歩している団員もいました。前述した生活環境のもとホストファミリーが本当の家族のように団員と接して下さったこともあり、ホームステイ最後の日には、多くの団員は、涙を流して別れを惜しみ、再会を約束していました。来年必ず村を訪れると宣言した団員もいました。

また、モー^{ハイ}2村地区のビン・ティン中学校やJICAプロジェクトが実施されているケー村での交流会でも、



(本人：後列右)

数時間の交流会にも関わらず、涙を流して別れを惜しむなど心の交流ができたようでした。

一方、JICAプロジェクトが実施されているケー村やホアビン省保健局、ホアビン省総合病院では、団員は、ベトナムの現状を目の当たりにし、日本と比較して、国際協力の必要性を実感していたようです。

青年海外協力隊をはじめとするJICA職員の方々との交流会などでは、目を輝かせて活発に質問をしている団員の姿がありました。

7泊8日という長いようであっという間だったベトナム滞在を通して、いろいろな体験を積み、団員は帰国しました。出発前の事前研修の時は、声が小さく、とても内気な様子の団員もいましたが、帰国後の解団式や報告会で発言している団員は、皆、目を輝かせ自信に満ちて見えました。この事業を通して、「国際貢献したい」「海外旅行会社で働きたい」など将来の目標・進路が見えてきて、そのための学習の必要性を認識した団員も多くいたようです。この事業の目的の1つである「国際性豊かな人材を育成する」の第一段階はクリアできたのではないかと思います。

最後になりましたが、各団員の今後ますますの国際交流・協力に関する意識の向上と積極的な行動、将来の国際社会での活躍を期待するとともに、この事業に御支援・御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

変わるけど変わらないベトナム

青年海外協力隊OB 山下 美穂

ベトナムを訪れるのは協力隊以来2年半振りであった。国際協力体験事業の同行という立場での期待と不安もあったが、久しぶりのベトナムに対する個人的な期待と不安も大きかった。

個人的な期待はベトナム料理。隊員活動も終わりが近付くと、帰ったらベトナム料理が食べられなくなる、やっていけるだろうかと不安を覚えたものだ。でも平気だった。日本の気候では日本食が美味しかったからだ。川や緑や通りを見ながら、鳥の声やクラクションの音を聞きながら、自然の気温の中で食べるベトナム料理が懐かしい。そして、久しぶりのベトナム料理は相変わらず美味しかった！

個人的な不安は、発展し変わったであろうベトナムに行くこと。地上に点々と明かりが見え始め、私達はハノイ郊外のノイ・バイ空港に夜間降り立った。2年半前この空港から帰国した時は、窓の下に見えるのは真っ暗な闇であった。周りには田んぼしかなかったから。ハノイは発展し変わったと、やや感傷気分で空港施設に移動した。やっぱりベトナムは変わっていなかった。4年前に出来上がった新空港のトイレ、隊員時に田舎から上京し初めてこのトイレ見た時、近代さに目が点になったものだ。最新式の水洗式トイレ、ピカピカの大理石の台にセンサー付きの手洗器、どちらも本来の機能を失い、町中にある大衆食堂のトイレと化していた。洗濯や洗髪をしたり、ベトナム風に使用する内にこうなったのだろう。ノイ・バイ空港のトイレで感傷気分は一気に吹き飛び、笑い出したくなった。したたかであくましいベトナムは変わってない！

さて、私の同行の役割は医療コーディネーター。出国前に色々考えて、食あたり・すり傷等は想定内、救急ハンドバック片手に小さな傷を侮っては大変なことになりますとおどしてみたり、水を飲みなさいと威嚇したりしたが、山登りは想定外であった。色々有ったが、みんなで無事に帰国できた時は本当にホッとした。

そして、普段あまり接する事のない中高生との交流や、中高生がベトナム人と交流を深めて行く姿は非常に新鮮であった。団員は事前に習った簡単なベトナム語の自己紹介を初対面のベトナム人に通じさせていた。「ご飯食べた？」が通じるのに1年かかった私から見ると本当に快挙である。団員は13歳から18才の思春期と



(本人：一番左)

いう多感な時期、この交流で得た経験がその後の生き方におよぼす影響は小さくはないだろう。団員の皆さんの活躍を楽しみにしています。

Hen Gap Lai☆

15人兄弟

JICA国際協力推進員 原 奈美

今年2月末、今回の派遣国がベトナムに決定してから、私の生活はベトナム一色になりました。ベトナムというこれまで訪れたことのない国を徹底調査。「ベトナム」ということばを耳にするだけで過剰反応してしまうほどでした。そして、5月。ベトナムへの同行が決まってから、今度は、私の頭の中は子どもたちのことについていっぱいになりました。どんな子たちと一緒に行くのだろうか、全員が元気でいい時間を過ごすことができるだろうか、と期待と不安の毎日でした。

書類審査や面接を突破して選ばれた14名の団員と初めて顔を合わせた6月の第一回事前研修。まだまだ顔と名前が一致しません。一泊二日の二回目の事前研修で、なんとか顔と名前が一致。そして、性格も徐々に感じ取ることができたのもこの時でした。ベトナムに行くのが楽しみ！というよりは、子どもたちの表情からは緊張と不安が感じられました。思い起こせば、私も緊張し、不安でいっぱいだったような気がします。

出発当日、子どもたちの御両親から「うちの子どもをよろしくお願いします。」と頭を下げられて、責任の重さをひしひしと感じ、全員が元気で帰国報告できることだけを頭に私の8日間がスタートしました。

旅の最初の頃、子どもたちは「いい子」すぎました。どんなに小さな変化でも知っておきたかった私には、「元気？大丈夫？」という質問に皆が口をそろえて「大丈夫です。」と答えることに対して、逆に心配が募りました。頭が痛くても遠慮して言わない子、気分が悪くても無理をしてがんばってしまう子、不安があっても心の中に閉じ込めてしまう子。そういう年頃だということ、そのように日本で生活してきたというそれまでの習慣が、子どもたちの素直な気持ちを聞きたいという私にとっては厄介なものでした。自分の中学時代、高校時代を思い出し、どのように接すれば子どもたちが心を開いて正直に話をしてくれるかを常に考えていました。もっと上手く感情を外に出すことができればいいのだけれど、と思いつつ時間が経つのを待っていました。

子どもたちが変わり始めたのは、モーハイ村での2日目からです。それまで、団体行動をしていたのが、ホームステイで一人になってしまったことと、ことばがなかなか通じない中、どうにかホストファミリーに自分の言いたいことを伝えなければならないという状況が、子どもたちの心の扉を開けてくれました。表情が軟らかくなり、「元気？大丈夫？」という問いかけにも「元気ですよ。今までずっと歩いてたから疲れた



(本人：後列白のTシャツ)

けど。」と一言、二言コメントが返ってくるようになりました。そして、時間が過ぎれば過ぎるほど、喜怒哀楽の表現が豊かになってくるのです。子どもたちの本来の姿をやっと見るできるようになりました。

自分の外側の壁をきれいに守っている子どもたち。何事も言われたとおりにできるし、団体行動を乱す子はいません。「国際理解」「国際協力」について聞かれても、「きれいな」答はいくらでもできます。子どもたちは、どういう答だと周囲が評価してくれるのかわかっています。しかし、「問題のない行動」や「きれいな答」に出会うと、子どもの内側に秘めたものが余計見えづらくなってしまいます。今回の旅でも、模範通りの「いい子」たちが、どこまで自分をさらけ出すことができるようになるかということを楽しんでいます。

14名の子どもたち。人に頼ること、甘えることができるようになった子。どんな境遇でもマイペースで、柔軟性のある子。小道具を使って、上手にコミュニケーションをとれる子。環境の変化に積極的に突き進んで行く子。怒られながらも、すべてを心で受け止め、体全体で感じている子。不安を上手に見せられるようになった子。誰にも負けない根性があり、そして涙もろい子。人の反応がだんだん気にならなくなった子。より多くの人のことを気遣うことができるようになった子。泣いて、沈んで、そして一回り芯が強くなった子。感情を顔に出すことができるようになった子。戸惑いながらも、すべてを受け入れる子。大人の言うことを素直に聞くことができるようになった子。口数が増え、笑顔が増え、自分らしさを出せるようになった子。

全員元気で御両親の元へ返すことができた最終日の鹿兒島空港で、団長が涙ぐみ、そして団員が涙を流しながら、この旅の思いを立派に、そして心からのことばで話す姿を見て、私の14人の弟、妹たちと出会えたことに感謝せずにはいられませんでした。この瞬間、私にとってのこの夏の「異文化理解」、大人と子どもとの間にあった一線を越えることができたような気がしました。

シン・チャオ!

南日本放送 政元泰江

「政元、ベトナムに行ってみないか？」突然上司にそう言われた私は、内容も聞かずに二つ返事でOKしました。アオザイ、美食、世界遺産・・・私にとって初めての海外取材。その上、ベトナムは行ってみたいと以前から思っていた国だったのです。

しかし、その後が続いた言葉で、私の甘い期待は裏切られました。「少数民族の村にホームステイする。ま、体には十分気をつけて生きて戻ってこい。」

水には十分注意するように。食べ物は、薬は、治安は・・・などと先輩たちから様々なアドバイスをもらい、冷や冷やしながら行ったベトナムでしたが、実際のハノイやモーハイ村は、想像していたよりも衛生的で過ごしやすく、大助かりでした。

さて、初めて14人の中高生に出会ったとき、「取材して、ものになるだろうか・・・」と、一抹の不安を覚えました。説明会などでは、皆、猫をかぶっていて大人しかったからです。その反面、この状況からどれだけ14人が変わるかというのも楽しみでした。さあ、ドラマを撮るぞ!と、ワクワクしたものです。

ベトナムでは、みんな驚くほどに変わっていきました。不便な生活にも関わらず、言葉も表情も生き生きとしているのです。また、体調を崩した人もいましたが、そのことで、村の人の思いやりや優しさを感じ取ることができたりして、逆に深い体験ができたのではないかと考えています。

取材して話を聞いていると、みんなが共通して口にすることがありました。「日本は発展しすぎ。ここにいれば、この生活が普通に思える」「日本にはない人のやさしさや温かさがある」と。私はドキリとしました。鹿児島は、決して大都会とはいえない、自然や人の温かさのあるいい県だと思っています。それでも、10代の若者が何かがたりないと恒常的に感じているというこの現実、この鹿児島でも、大切な人と人との関わりが失われつつあるということを如実に表しているのだと思います。

日本はベトナムに対し、世界でもトップクラスの支援を行っている国です。今回の事業でも、国際協力を行っている専門家の仕事ぶりも視察しました。しかしこの事業では、国際協力の必要性を感じたと同時に、失われつつある人と人との一番基本的な関わりや、人



(本人：一番手前)

間としてのシンプルな在り方を、こういった国々の人々は逆に教えてくれるのだということも知りました。

鹿児島に帰ってきた14人の挨拶を聞いて、なんと、この短い期間に、これだけの成長をしたのだろうと感動しました。様々な体験がすぐ消化されて、身についていく。そしてそれが一生を通じての宝になる・・・10代の皆さんの素晴らしい特権ではないかと思います。

是非、この体験を活かして、これからの人生を歩んでいてもらいたいと思います。

最期に、この事業を支えてくださったスタッフの皆様、心より御礼申し上げます。

ヘン・ガップ・ライ!!

14人の熱い夏に寄せて

南日本新聞社 山本輝志

ベトナムは以前から訪れてみたい国だった。個人では足を延ばしにくい農村部に行けるとあって、上司から打診された同行取材は二つ返事で引き受けた。

とはいえ、気ままに一人旅に出かけていたのとは全く勝手が違う。民家でのホームステイ、ベトナム語の壁一。正直言って、期待と不安が入り交じった感覚は、海外は初めてという中高生たちと大して変わらなかった。

棚田に囲まれた村では、ノスタルジックな雰囲気を楽しむが、ホストファミリーとの意志疎通は、予想通り！初日から四苦八苦した。たった三十秒で済むような簡単なやりとりでさえ、会話帳で一つ一つ言葉の意味を確認しながらでは、あっという間に二、三十分は経ってしまう。愛想を尽かさず根気よく付き合ってくれた一家には、感謝の気持ちでいっぱい。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、今回の体験事業の主役だった中高生十四人。

現地での表情や話しぶりからは、言葉の壁にぶつかりながらも、案外スムーズに村の生活になじんでいったことが伝わってきた。特に年齢の近い子供たちとは早々に心を通い合わせたようで、村に着いた翌朝から手をつないで散歩する様子は、それを象徴していた。

ふるやトイレなど、「湯水のように使える」日本と比べて不便な生活に戸惑った面はあったようだ。だが、「もう帰りたい」「あと二、三日我慢すれば…」といった愚痴を聞けるのではないかというメディア的な“期待”は肩透かしを食った。

まったく逆だった。日本が享受している豊かさがはらむ無駄や浪費、節約の大切さを肌身で感じとっていた。自国の暮らしぶりを振り返り、冷静に相対化できたわけだ。現代っ子たちの柔軟な感性には脱帽する。

包容力あふれた村人らとの触れ合いを通じて人と人とを結ぶ絆に気づき、日本の豊かさを省みる機会が持てただけでも、村に滞在した意義は大きかったに違いない。

一方、JICAプロジェクトの視察では、途上国の地方の病院が置かれた厳しい現状に驚き、辺鄙な山奥まで植林プロジェクトの支援が及んでいることを知った中高生。実際にベトナムで活躍する鹿児島出身の青年海外協力隊員との懇談では、身を乗り出し聴き入っていた姿が印象に残っている。



「他人の写真ばかり撮ってないで、私と記念撮影しないかね。」
植林プロジェクト視察で訪れたケー村の長老と一枚パチリ。

帰国後のインタビューや報告会で、多くの生徒が「将来は協力隊員になりたい」「海外で働きたい」との思いを口にした。明確に将来のビジョンを語る姿は頼もしかった。「国際理解とは互いに異なる文化を認め合うこと」「途上国への偏見が解けた」といった言葉にも、成長の跡がうかがえた。

体験事業の参加者全員が国際協力に身を投じるわけではないだろうが、せっかく芽生えた熱い思いは消したくない。そのためには、継続的に相談に乗ってあげられるサポート体制があったらいい。新聞の連載記事をまとめながら、そんなことを考えた。



言葉の通じない大の大人にも、親身になって接してくれたグエンさん一家

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数(生徒数)	参加者の出身市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル・サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,阿久根市,名瀬市, 市来町,伊集院町,祁答院町, 内之浦町,佐多町	公募
第2回	マレーシア (クアラルンプール・スランベラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,鹿屋市,大口市, 指宿市,隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン・テラガアイール)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,加世田市,三島村, 隼人町,志布志町,高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン・パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市,出水市,指宿市, 垂水市,菱刈町,霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市,国分市,頰娃町, 宮之城町,隼人町,吾平町, 根占町,中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン・バレットムソトリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市,串木野市,東市来町, 伊集院町,郡山町,日吉町, 吹上町,金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン・テラガアイール)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市,大口市,国分市, 菱刈町,始良町,蒲生町,溝辺町, 横川町,栗野町,吉松町,牧園町, 隼人町,福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ・ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市,指宿市,加世田市, 喜入町,笠沙町,知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ・メーカンポン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市,鹿屋市,国分市, 垂水市,祁答院町,財部町, 未吉町,串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン、フーホイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市,出水市,加世田市, 国分市,垂水市,祁答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン、タンビン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市,串木野市,枕崎市, 国分市,垂水市,溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県 を予定していた)	平成15年度 SARS及び 鳥インフルエンザの 影響により中止			市町村 推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ市、 トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市,枕崎市,国分市, 実行委員会枠	市町村 推薦 実行委員会 選考



=編集・発行=

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町14-50かごしま県民交流センター1階

(財)鹿児島県国際交流協会内

TEL : 099-221-6624 FAX : 099-221-6643